

第 22 回 猪名川自然環境委員会 議事概要

1. 日 時 平成 25 年 3 月 26 日（火） 14:00～15:40
2. 場 所 大阪マーチャンダイズマートビル（OMMビル） 地下 1 階ギャラリー
3. 出席者 池淵委員、斉藤委員、菅原委員、田中委員、松井委員、森下委員（委員長）
猪名川河川事務所：福岡副所長、（調査・品質確保課） 荘司課長、横山係長、
（工務課） 岸本課長、中澤係長、（管理課） 松井課長（占
用調整課） 松寺課長
河川環境管理財団：今井、宝藤
傍聴：4 名
4. 議 事 (1) 第 21 回自然環境委員会・第 11 回総合土砂管理委員会での指摘とその対応
(2) 北河原地区河原再生試験施工に関するとりまとめ
(3) 平成 25 年度工事予定箇所の環境への影響と対策

5. 結果

(1) 第 21 回自然環境委員会・第 11 回総合土砂管理委員会での指摘とその対応

- 土砂移動を考慮した河道掘削と自然再生の検討、平成 19 年度に実施した河床変動予測の検証についての対応方針について確認が行われた。

(2) 北河原地区河原再生試験施工に関するとりまとめ

- 今後実施していく河原環境の再生を目指した切り下げについて、試験施工の結果を反映した断面を提案し、了承された。
- 提案した切り下げは、平成 25 年度に予定している北河原地区の高水敷掘削と調整し、掘削範囲・形状等を再検討した上で、実施可能であると判断できれば、2 回目の試験施工として実施する。
- 試験施工として実施した場合は、モニタリングを行い、礫河原が維持できる条件、湿地生植物群落が成立する冠水頻度・時期を検証していく。
- 礫河原の維持・再生と冠水頻度・無次元掃流力・砂礫の粒径との関係について、試験施工で確認できたことと今後の改善点を簡潔にまとめることが望ましい。
- 流入土砂や外来種等について、過去に礫河原が形成されていた当時と現在の状況を比較整理し、持続可能な礫河原を創出するための要素・要因を明らかにすることが望ましい。
- 試験施工地全体における植生の経年変化において、落葉広葉樹林の面積が大きく変化したり、突然出現したりしている。調査データの経年的な信頼性を確保しておく必要がある。

(3) 平成 25 年度工事予定箇所への環境への影響と対策

- 平成 25 年度に工事を予定している「椎堂地区」「北河原地区」「北伊丹地区」「東久代地区」「川西・池田地区」の河道掘削等の工事、高木井堰下流部における河道内樹木の伐採について、計画内容および構造検討部会からの意見が説明され、委員による確認が行われた。
- 北伊丹地区河道掘削他工事は、工事範囲に位置するヒメボタルの密集地を次世代のヒメボタルまでが維持できるように、地盤を改変しない範囲を専門家に聞き取りを行う。また、その範囲は、次回の構造検討部会で報告し、委員による確認を行う。
- 椎堂地区河道掘削工事は、カヤネズミをはじめ様々な生物が生息しているオギ群落を広がりを持って保全することが望ましい。また、やむを得ず掘削する場合は、近傍に代替地を設けることが望ましい。
- 東久代地区河道掘削他工事は、可能な限り水陸移行帯を設け、エコトーンを再创出する仕掛けが必要である。特に両生類にとって非常に重要である。
- 川西・池田地区河道掘削工事は、治水安全度を確保しながら、現況の岩を残すような工法を採用することが望ましい。景観が単純になるということは、生息場所としても非常に単純な環境となるため、生息する動植物も単純になってしまう。
- 外来種の駆除は、単独で検討・実施している。河道掘削工事において、外来種が生育しにくい構造も検討していく必要がある。

(4) その他

- 猪名川の目指す自然景観について、かつての姿を取り戻すのか、現在の流況等に合わせたものにするのか、検討を始める必要がある。
- 現状の猪名川において、上流から多くの土砂を供給することは困難である。さらに、短期間での河道掘削であり、非常に厳しい環境づくりである。河道掘削で発生する土砂を置き土して流下させる取り組みを検討してはどうか。
- かつて（昭和 30 年代）の猪名川の河原を再生するという目標の妥当性について、土砂管理を含めた検討が必要である。現在の河道掘削は、砂州河道を創出していくうえで多様性よりも直線化に向かう方向であり、目標を再検討すべきである。
- 多くの人々は、猪名川の変化を知らない。過去の猪名川の状況、生態系や人との関わりなど、現在の猪名川へと変化した要因と改善していくための工夫などについて、一般の人々にわかりやすく説明できる資料の作成について検討する。

以上